

業界 Information

八戸港湾運送(株)

賛助会員

弊社の社名に入っている「港湾運送」とは船舶への貨物の積卸しなどを行う荷役をはじめ、貨物の仕分け等を行う上屋等への搬出入及び一時保管、さらには船積み貨物の重量の検査や証明等を行なう業務です。それらの業務のうち弊社は荷役から一時保管、また弊社グループ企業を通じて関連業務や配送を行っております。

今回は弊社の畜産や飼料との関わりについてお話しします。弊社は国内外から貨物船で運ばれてきた飼料を本船クレーンや会社所有の大型クレーンで陸揚げし、自社や近隣の飼料倉庫へ入庫しています。

自社倉庫として総床面積3,230㎡の2号埠頭倉庫、3,984㎡の1号埠頭倉庫、3,090㎡の低温倉庫などがあり、飼料や飼料添加物を保管、お客様のオーダーに合わせて出庫しています。



外国貨物を輸入する場合、貨物の品目や数量、金額、輸入先などを税関に申告して、輸入許可を得ることになりますが、飼料貨物の多くはその過程において植物検疫が必要になります。植物防疫所は空港・港に設置されており(八戸港にも出張所があります)、植物防疫官は、日本国内の植物に被害をもたらす危険性のある病害虫が、海外からの輸入品に混じっていないかを検査しています。

八戸港にはコンテナ定期航路も開設されているため、貨物

船だけでなくコンテナでも飼料や飼料添加物が輸入されています。貨物そのものだけでなく、コンテナに同梱されている木材の梱包材や木製パレットにスタンプや焼き印などの消毒処理表示がない場合は、それらも植物検査の対象になります。

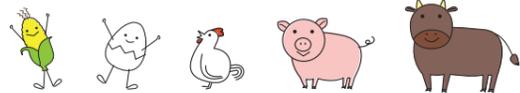
検査の可否によってはくん蒸が必要になり、入庫する倉庫も変わってくるため、私たちは荷役業者、そして荷主代行の立場としても、その検査の様子を注意深く見守ります。

最近ではトラック運転手の労働規制が強化された物流の「2024年問題」を受け、八戸港に寄港するRORO船の貨物量が増加しています。RORO船とは貨物を積んだトレーラー等が、そのまま自走して乗り込み運搬できる貨物船のことで、RORO船は基本的にドライバーは乗船せず、シャーシのみを目的港まで輸送しますので、ドライバーの働き方改革にも寄与しています。RORO船で飼料関係の貨物を八戸港に運ぶお客様もおり、輸送手段をトラックから船舶に切り替える「モーダルシフト」をすのおお客様の利便性向上を高めるべく、弊社もトラクターヘッドを増やすなどして対応しています。

このように、海上輸送と陸上輸送の結節点としての八戸港において、弊社は「未来と夢を海からひらく」をモットーに地域経済発展の一翼を担う企業としてこれからも努力を重ねてまいります。



事務局だより



4月、当協会も新年度を迎えました。昨年度は会員皆様、関係各所等多方面からご協力を賜り計画事業については概ね実施することができました。感謝申し上げます。今年度も畜産に係る啓蒙と振興活動に取り組んで参りますので、会員皆様には引き続きご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。



今後の予定

6月19日(木)
● 定時総会・懇親会
(八戸プラザホテル)

6月または7月
● 畜産施設見学会

業界の枠をこえ、地域に根付いた活動を目指して

Linkage

リンケージ

(一社)青森県畜産・飼料コンビナート振興協会 PR情報誌



vol. 16

(2025年4月発行)

< 発行 >
一般社団法人
青森県畜産・飼料コンビナート振興協会
〒039-1164 八戸市下長二丁目2-24
下長第4オフィス2階7号室
TEL:0178-51-8868 FAX:0178-51-8876
WEB:https://linkage-aomori.jp/

< 編集 >
総務委員会

私の履歴書

中部飼料株式会社 代表取締役社長 藤田 京一



八戸工場勤務は、私にとって2回目の転勤でした。昭和55年(1980年)に当社に入社し、約7年間、新名古屋工場(現在の知多工場)に営業として配属されました。最初に、新設されたばかりの牛飼料専門の販売部隊(大動物部)に配属となり、平野武雄会長(初代 代表取締役会長)指揮のもと、自社で生産した(タイ王国に2カ所工場所有)パインアップル粕を使用した牛用配合飼料の販売に奔走しました。当時の報告(日報)はすべて官製はがきでの報告であり、現在のように携帯電話もなく、週初めに在社し、週末に帰るという出張生活の連続でした。また、当社の年間配合飼料の生産量は、50万トンにも満たない小さな飼料会社でした。

その後、昭和62年(1987年)から平成5年(1993年)の6年間、横浜の仕入部に配属となり、全工場の主原料を買い付ける業務を担当し、1985年のプラザ合意後のバブル景気の真っ只中から崩壊まで、日本の栄枯盛衰を経験させていただきました。当時の為替は、240円/ドルから120円/ドルまで円高が急激に進み、とうもろこしの価格は100ドル/トン前後まで下落したことを記憶しています。円貨にして15,000円/トン程度と、現在のとうもろこし価格の約半分の価格で推移しました。

その間、米国の干ばつによるとうもろこし相場の高騰も経験し、毎日買えない日々が続く、夜中に現地(シカゴの商社事務所)に直接電話をかけ、連日オーダーを入れましたが、シカゴ定期はオープニングからリミットアップ。取引が成立せず、とうもろこしを1粒も買えない日々が何日も続き、不安と寝不足の毎日でした。この買い付け業務を経験したことが、その後の原材料価格の見通しや相場感など、大変勉強になりました。当社は、昭和57年(1982年)に八戸工場、昭和63年(1988年)鹿島工場、平成5年(1993年)には、北海道工場と、立て続けに飼料工場の建設が進み、平成6年(1994年)には、年間の配合飼料生産量は150万トンまでに達しました。この躍進に大きく貢献したのが、現在の八戸工場のフル操業です。

その後、平成5年(1993年)から平成20年(2008年)までの15年間を八戸工場で営業として勤務。当時の八戸工場は、年間60万トンの生産量を維持し、北海道工場の本格稼働に向けての稼働が続き、月間25,000トン余りの配合飼料をフェリーで苫小牧港のSPまで回漕しました。1日に約1,000トン、コンテナシャーシーで50台余りの物量になります。いつも最終便のフェリーを遅らせ、皆さまに大変ご迷惑をお掛けいたしました。

いよいよ八戸での生活が始まります。まず苦労したのは、方言(津軽弁は特に分からない)と、日本酒文化です。青森、秋田、岩手と酒処で、必ず日本酒。また、はしごが当たり前の時代で、毎日毎日午前様。当然お酒も強くなりました。また、業界ではいち早く八戸コンビナートに進出した工場として、その存在は知られています。工場の進出によって、業界に「八戸戦争」といわれる販売競争の激化をもたらしましたが、東北地方の畜産の振興に大きく貢献したとの評価も頂いております。また、その後の当社大躍進の起点ともなったのも、この八戸工場であります。

(一社)青森県畜産・飼料コンビナート振興協会様の前身である「三八地域養豚養鶏振興協議会」の設立に関して、微力ながら参画させていただき、大変お世話になりました。その後は、養牛も含めて、平成24年(2012年)に「青森県南畜産振興協議会」に改称し、現在の組織になったと伺っております。地域の採卵養鶏、ブロイラー、養豚、養牛の各生産者及び飼料メーカー、関連資材、薬品メーカーなど多数の会員からなる、畜産や業界の枠を超えての素晴らしい組織であり、東北の畜産振興への多大なる貢献は、頭が下がる思いであります。結びとなりますが、引き続き今後も畜産振興を通じて、地域経済の活性化を押し進める組織として、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

Pick Up NEWS

こども料理教室

コロナ禍期間を除いて毎年1回「はっち」(八戸市)で開催してきたこども料理教室ですが、2024年度は千葉学園高等学校調理科のご協力を得て1回増やし2回開催することができました。

1回目は昨年10月20日、小学生14名が千葉学園高等学校調理科の生徒と一緒に下ごしらえから調理まで、青森県産たまごと鶏肉を使って「オムライス」を作りました。完成後は家族と試食、きれいな出来ばえに皆笑顔になりました。たまごの生産者(株)オリエンタルファーム様の出前授業もあり楽しい学びの場となりました。



2回目は2月1日、小学生14名が青森県産鶏肉とたまごを使った「鶏むね肉のピカタ フォンドヴォーソース」に挑戦、本格的なソースも作り、味付けと盛り付けはそれぞれ少しずつ違いましたがそれも個性、皆で美味しくいただきました。また、今回は鶏肉を提供したプライフーズ(株)様が卵からひなが育ち鶏肉になるまでを映像で紹介しました。

こども料理教室は、県産畜産物を使ったメニューでこどもたちが主体となって調理を行い、下準備、調理、試食、後片付けを通して畜産物への興味と食の大切さへの理解を醸成します。また指導いただく高校生の皆さんにとっても小学生に教えるという普段なかなかできない体験です。最初は共に緊張していた小学生と高校生のペアも教室が終わるときには皆笑顔でハグして別れを惜しまました。

昨年11月15日、八戸プラザホテルで「第6回畜産グルメパーティ」を開催、青森県産の牛肉、豚肉、たまご等をふんだんに使ったメニューで、県産畜産物の美味しさを堪能いただきました。畜産物を中心に豪華景品が当たる恒例の大抽選会は、今回は9割以上の当選確率となり大いに盛り上がりました。今後も青森の畜産物の魅力を発信してまいります。ご協賛いただいた会員企業皆様に感謝申し上げます。

畜産グルメパーティ



参加者 190 名が県産畜産物による様々な料理を味わいました

知事との意見交換会



宮下知事(前列左から二人目)と出席者

2月17日、青森県畜産課の協力を得て宮下宗一郎知事と当協会との意見交換会を東北グリーントーミナル(株)(八戸市)で開催しました。知事のトウモロコシ本船荷役の視察後、協会からの畜産振興についてのレクチャーに続いて、鶏・豚・牛の生産者並びに飼料コンビナートを代表する協会員がそれぞれの課題について発言、忌憚のない意見交換が行われ、青森県の畜産振興に向けた共通理解の形成が図られました。

農業高校生の施設見学会

2月25日、青森県立三本木農業恵拓高等学校1年生29名が、先進的な大規模酪農施設である(株)NAMIKIデリーファーム(野辺地町)と八戸飼料穀物コンビナートの中核サイロ会社である東北グリーントーミナル(株)(八戸市)を見学しました。この2カ所を見ることで、世界の穀倉地帯から輸入された穀物で配合飼料が製造され農場に運ばれて家畜を育て、生産された畜産物が消費者へというプロセスを学習しました。また現場で働く人たちの仕事への想いなども直接聞いてたくさん学びがあったようです。

NAMIKI
デリーファーム

ロータリーパーラによる搾乳

東北
グリーントーミナル

サイロ上から
本船荷役を見学



講演会・新年懇親会

2月28日、「地方における人材確保・人材定着対策」と題して、島守経営労務事務所(八戸市)代表島守雅之氏による講演会を開催しました。現在、畜産業界のみならず産業界が直面している課題への実践的な対策についての講演を、会員、行政、関係者ら120名が熱心に聴講しました。講演会終了後の新年懇親会も盛況で業界の枠を超えた情報交換の場となりました。

